
没物語 序章

伊達倭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

没物語 序章

【Zマーク】

Z2575H

【作者名】

伊達倭

【あらすじ】

不思議な力を使わずに女体化する話。下ネタが多いといつも、下ネタだらけなので注意。

好きな女は同性愛者だった。

その事実を告白する前に知つていれば、夕焼けに染まつた放課後の教室というシチュエーションのために、天気予報で晴れの日を狙つて呼びだしたりはしなかつたし、三日三晩寝ずに考へた台詞をトチることもなかつただろう。

「スマン。私、女の子しか興味ないんだわっ！」

底抜けの明るさは彼女の何よりの魅力であつたが、燃えるような夕日を背景にした、張り詰めた空氣の中でも健在だとは思わなかつた。

「そーいうわけで、友達以上には思えないつ。悪いねー！」

断られることも覚悟の上で告白したので、結果だけ見るとさもありなんだが、せめて頬を赤らめる程度のリアクションはあると思つていた。あつけらかんと、まるで緊張感のない言葉。

それは友達という関係を続けるための、彼女なりの気遣いだつたのかもしれない。単に、表裏のない性格の現れだつたのかもしれない。

ここで本来ならば「清々しいヤツだな」とでも思えば、まだ救いはあつたのかもしれない。「世の中、理不尽だ」とイジければ、それなりに活路もあつただろう。

しかし、一世一代の告白が特大のインパクトを持つ言葉の前に撃沈した俺は、正気ではなかつた。

そう、正気ではなかつたのだ。もしも正気ならば「男の良さを教えてやる」と奮起するなり、「付き合いくれないと諦めたりできただろう。

繰り返すが、俺は正気ではなかつた。

「よしわかつた。じゃあ、俺が女になつたらいいんだな？」

大事なことなので、何度も言つ。

俺は、正気じゃなかつた。

最重要項目なので、しつこいくらいに言うが、俺は正気じゃなかつた。だが、真剣ではあつたと弁明しておきたい。

呆気にとられる彼女　　御園橋やよいに「愛の前に性別なんて壁は、低すぎるんだぜ！」という捨て台詞を残して、俺は実に雄々しい大股で、教室を飛び出した。

そのまま全力で走つて自室に帰り、階段を一段飛ばしで自室を通り越して、姉貴の部屋に飛び込んだ。

「姉貴、俺を女にしれくれ！」

飛び込んだ勢いのまま土下座する弟に、姉貴は下着姿のままゲンコツを見舞つた。

「このトンカチ。男にしてくれつてんなら話はわかるが、女にしてくれたあ、どういう了見だ、コラ！」

姉貴は豊かな胸を包む下着を一応、手で隠しながらも、およそ女らしからぬ台詞を吐いた。

状況からすれば姉貴の言葉は実に小粋で、それ以上に背徳的だったのだが、生憎と俺は正気ではない上に、ほとんど何も考えていかつた。

「俺は元から男だ！」

もしも、「やつぱり男にしてくれ」と言えば、俺は性別の壁を越える前に、血の絆を超えていたのかもしれない。

姉貴は美人で、胸が大きい上に腰の細い、大人の女性であつた。筆おろしには勿体ないほどの肢体と美貌である。男である最後の軌跡として、お姉ちゃんとのイケない遊びも悪くない。

「……チヨン切るか」

俺の思考が完璧に男に戻つたところで、姉貴は大型力ツターナイフの刃をチキチキと出して、俺の前に仁王立ちした。俺は思わず姉貴の立派な肢体を見とれつつも、土下座からの後転で難を逃れる。

「こりツ。女になるんだろ？」

姉貴もさるもので、鮮やかな跳躍で俺の背後を取り、一瞬で羽交い締めにした。背中に感触が二つ。やーらかい。

「よし、ちょうど切りやすくなつたみたいだな」

女としてはほぼ最低の台詞を吐きながら、姉貴はパンツに挟んでいたカツターナイフを再び取り出す。イケない遊びじゃなくて、アブない遊びだ。比喩表現ではなくて、割とマジに。

「古来の中国で、宦官かんがんはみんなチヨン切つてたんだ。死にやしないだろ」「じめん、姉貴。俺が全面的に悪かつたので、とりあえず離してください」

昔の中国人はスゲエと思いながらも、現代に生きる日本人である俺は、長い物には巻かれる生き方しかできない。ついでに言えば、まだ自身の長いモノに別れを告げるほど、人生を楽しんでもいなかつた。

「ちゃんと根本を麻紐で千切れんばかりに縛つて、失血死しないよう処置してやるぞ。チヨン切つた後は、確か焼いて傷口を塞ぐはずだ。包丁を焼いて押しつければいいか

「誠心誠意、心の底からお詫びしますから、やめてください」

俺が土下座の姿勢を保つっていたのは幸いだった。謝るのに都合が良い。

「……根性無しめ」

姉貴はようやくカツターナイフを（やつぱりパンツに）仕舞うと、少しだけ腕の力を緩めた。

「それで、どうしたテツ。お前にしては面白すぎる[冗談だつたが]姉貴はぐりぐりと俺の頭を撫でながら 多分、気に入ったのだろう 胸を押しつけるように身体を揺すつた。

俺は背中に至福の感触を得て、ようやく落ち着きを取り戻す。頭に上つていた血が、下の方に集まつたおかげだらう。

「いや、それがだな。好きな女に告白したら、女が好きだからゴメンと言われてだな」

「それで、チヨン切る決意を固めたのか」

「ソコだけは、ほら。記念に残しておきたいです」

「ふむ。まあソコは武士の情けだな。それでお前は女になると決意したわけだな」

流石は十七年間、俺を奴隸のように扱つてきた女である。一言で説明は済んでしまつた。そして。

「よしわかつた。じゃあ、今からテツは私の妹だ！」

血の繋がりを感じずにはいられない台詞をのたまうのだった。

「テツ。男が女になるために必要なモノは、何かわかるか？」

「胸と尻とクビレだ」

「我が弟……もとい、妹ながら、最低だな」

「うなじと睫毛^{マツケ}と唇も捨てがたいかな」

姉貴は無言でゲンコツを俺の頭蓋骨頂に叩き落とし、冷ややかな目で俺を蔑んだ。

「もう一度聞くぞ。男が、女に、なるために、必要な、モノは、何か、わかるか？」

「おしとやかないと、優しさと、可憐さあります」

「よろしい」

おしとやかというよりも、したたかという表現が相応しい我が姉だが、それは黙つておく。なぜならば、姉貴は美人でマシユマロみたいな胸の持ち主で、尻も水桃の「」とく張つていて、クビレは備前有田焼という完璧超人でありながら、自分がおしとやかで優しい、可憐な乙女という勘違いをしているからだ。豪快すぎる性格のせいで彼氏ができるないことも、気付いていない。

「まあ、見た目も重要には違いない。幸い、骨張つてないし、童顔だから化粧でなんとかできるか。眉は剃れ」

「了解であります」

「あとは、脇毛^{わきげ}も剃れ」

「アイサー！」

「膚毛もだ。全部剃れ」

「あ、あいせー……」

姉貴の言わんとするところは、理解できるが、俺は言葉を詰まらせた。

やはり見た目は重要であり、膚毛など、男の象徴のようなものである。しかし、全部剃つてしまつのは少し抵抗がある。

体育の時間に、着替えている最中に笑われたらどうしようかと思つと、とても剃れない。

「なんなら、別のモノを剃り落とすか？」

「膚毛、全部剃るであります！」

辛くもチヨン切られることを免れた男子の象徴にして尊厳を引き合いに出されれば、もう拒否する術はない。実に素直で気持ちの良い返事をしてしまつ自分が小憎い。

俺は逃げるように風呂場に向かい、愛用の髭剃りで脇毛と膚毛をキレイサッパリ剃り落とした。ついでに腕の産毛も剃るといつ出血大サービスである。

「姉貴、剃つてきた」

男魂と引き替えに失つたものの重さに、少し声を上擦らせながらも、姉貴の部屋に戻る。姉貴は相変わらず下着姿のままで、じつと俺の半裸体を眺めると、深い溜息をついた。

「……やっぱり、ソレも剃り落とさないか？」

「断固拒否する、であります」

姉貴が下着姿でいるのが悪い。血は繋がつてゐるが、それ故の背徳感やら、悲しい童貞の性やら、色々と男の子は大変なのだ。

「まあ、流石に勘弁してやるが、それでもやり直しだ。剃り跡が酷い」

「え。ちゃんと剃つたぞ？」

「てめえ、女のムダ毛処理を舐めんじゃねえぞ、コラ」

姉貴は万力のような力で俺の腕をねじ上げると、再び俺を風呂場

に連れ戻し、浴槽の縁に俺を座らせた。

「可愛い妹のためだ……教えてやるつ」

姉貴は俺の前に跪き、そつと俺の足を手に取つた。屈んだ拍子に、姉貴の巨乳がふるんと揺れて、風呂場というシチュエーションとの相乗効果で、俺は囁らずも再び臨戦態勢に入る。

「ナニを教えてもらうつもりだ、テツ？」

「ナ、ナニの処理を……」

姉貴は俺の必死のジョークに、平手打ちという拍手を送つた。まるでアーケードゲームのレバーの如く、豪快に薙ぎ倒された我が魂は、トランクスの中で、やはりレバーよろしく元の位置に戻る。とても元気が良い。いつそ殺してくれと思つほどどの痛みを伴いながらも、一瞬の快感が生まれたのは、氣のせいと諦つことにしておこう。

「……先が思いやられるな」

姉貴はそう言いつつも、丁寧にムダ毛処理の方法を、文字通り手取り足取り俺に伝授してくれた。

むづ、女性の身体というのは手間暇のかかるモノである。

スッキリとした身体になつたところで、ようやく姉貴も俺も服を着ることにした。

着替えの最中に乱入した手前、ずっと下着姿だった姉貴だが、別に露出狂でもない。無地の白シャツにジーンズというシンプルな格好ながら、元が良いのでカツコイイお姉さんの印象は崩れない。

「さて、次は眉毛の処理だ」

姉貴の部屋で、俺の女性化作戦が再開される。姉貴の手には、ピンセットのようなものが握られていた。

「剃るんじゃないのか？」

「抜いた方が綺麗だからな。皮膚が弱いと腫れるが、明日は土曜で休みだから、少々腫れても問題ない」

そう言つと、姉貴はおら俺をベッドの上に押し倒して、馬乗り

になつた。

「あ、姉貴？」

「ナニを期待しているかわかつてしまつのが悲しいが。妹よ、美とは、我慢の代名詞であることを知るがい！」

姉貴はニヤリと口をゆがめ、ゆつくりと俺に覆い被さつてきた。やつぱり筆おろしで男子を卒業なのかと、俺は目を閉じる。断つておぐが、このときの俺もやつぱり、あまり正氣とは言い難かつた。「うむ。皿を閉じていた方が、怖くなくていいだろうな。では、いくぞ」

唇に触れるであろう柔らかな感触を期待していた俺は、不意に皿元を襲つた激しい痛みと、ぶちつといつ生々しい音に、「きやあ」と悲鳴を上げた。

「お、良い声で泣くじゃないか。女の子らしくなつてきたぞ」皿を開くと、涙でにじむ視界の向こうで、姉貴が実に楽しそうにピンセットを弄つていた。

わかつていていたが、やはりこうこうオチだつたか。

「よし、ではどんどん行くぞ」

「いたたたッ！！ 姉貴、一気に抜くな。死ぬ！」

「チヨン切つても死なないんだから、抜いたぐらいで死ぬか！」

姉貴の至極真つ当な理屈に言い返せず、俺は十数分にわたる痛みとの戦いに興じるハメになつた。改めて思う。女の子は大変だ。

「お。哲もお年頃だな。一丁前に色氣づいて」

夕食の席で、親父が俺の顔を見てカラカラと笑つた。

姉貴に眉を整えられた後、両親に俺が女にならうとしている」とがバレるんじやないかとヒヤヒヤしていたのだが、よくよく考えれば、別に眉を整えることぐらい、男であつても何ら不思議なことではない。高校生である以上、化粧も派手にできないので、姉貴は化粧前提の眉ではなく、割とナチュラルな形に仕上げてくれたらしい。

会心の出来だというのは姉貴の言だが、鏡で見てみると、なるほど
どうして、自分とは思えないほど、顔立ちがスッキリしていた。

後は、髪を整えて軽く化粧を施せば、女の子としても悪くないレ
ベルであるという自負が出来るほどだ。童顔で、あまり背が高くな
いことを今まで「コンプレックスに感じていたのだが、女になるに
は、とても都合が良かった。

「やっぱりアレか。好きな子でも出来たか？」

一杯調子で機嫌の良い親父が、息子の眉の理由をしきりに問いか
けてくる。確かに好きな女のためには違いないが、これはあくまで
も下準備であることなど、言えるはずもない。

「ま、思つところがあつてわ」

「いーねえ。思春期つてヤツか」

まさか、息子が娘になろうとしているとは露にも思つていないの
だろう。

俺もまた、父親の幸福を願う一般的な息子 もとい、娘である
ので、詳しく説明することはしなかった。家族円満の秘訣はある
程度の距離感だというのが俺の持論だ。

「まあ、私がついている。変なことはさせないさ」

両親から絶大なる信頼を得ている姉貴の太鼓判に、母親も特に疑
うことなく、俺のおかわりをよそつてくれる。

「ああ、テツ。明日からおかわり禁止な」

俺がナスの浅漬けに手を伸ばし、お茶漬けを楽しもうとしている
ところに、姉貴が耳打ちしてきた。

「なんですか？」

「太つてるわけじゃないが、女になるなら、もう少し華奢じゃない
とな。今日はもう少しそつてるので構わんが、明日からは食事量を
減らせ」

「……了解」

男という生き物が、どれだけ脳天気に生きているかが、こうして
みるとよくわかる。

元々、食べてもあまり太らない体质だったので、食事制限など初めてのことだが、これはなかなか辛そうである。

「私もおわりー」

俺が人生最後かもしれないお茶漬けを涙ながらに食べる横で、姉貴は三度目のおわりを母に要求していた。

食べても太らないというか、食べただけ痩せるという超人なので、姉貴に食事制限という言葉はない。

「理不尽だ」

「まず理不尽な要求をしたのが、お前だからな」

姉貴には一生勝てないと思う。

そもそも、本当に女になってしまっていいのだろうか。というか、なれるのだろうかという疑問を（ようやく）持つたのは、明け方近くの夢の中だった。

愛しい御園橋が笑顔で笑いかけるといつ、実にステキな夢だったのだが、そこでハタと気付いてしまったのだ。

どうやっても、俺は御園橋のような愛嬌のある可愛い女にはなれない。

姉貴と同じ血が流れている俺なので、素質は決して低くはないのだろうが、それでも骨格は男であり、いくら痩せても華奢な少女になることは難しく、ハスキーボイスにしかならない。可憐な乙女とはほど遠い。

そんな冷静な夢に、ふと目が覚める。すると、二人の女が俺の顔を覗き込んでいた。一人は姉貴で、もう一人は姉貴と同じ年頃の、ぼーっとした感じの美人だった。

「どうだ、ヨツコ。我が妹は？」

「うん、弄り甲斐がありそうだね」

実に不穏な言葉をのたまないながら、ヨツコと呼ばれた女は、にっこり笑った。

「喜べ、妹よ。お前のために、わざわざ美容専門学校に通う友人に来てもらつた。女になれる日は近いぞ」

「あ、いや……実は、冷静に考え……」

「ヨツコ。早速だが頼む」

「はいなー」

冷静になつた俺だつたが、寝起きで力が出ないことが災いした。馬鹿力の姉貴に無理矢理、上半身を起こされ、そのままシーツが身体に巻き付けられる。

「な、なにをする！」

「身体の次は顔だ。手始めに、髪の毛。次に化粧。大丈夫だ、姉ちゃんに任せろ」

そもそも、俺が姉貴に「女にしてくれ」と頼んだのは、姉貴が超人的な存在であり、一旦引き受けたことは必ず実行してくれると知つていたからである。やるとなれば出費や労力など、一つも惜しない。それはつまり、一度姉貴が「よし」と言えば、もう後戻りが出来ないことを意味していた。

「お、お姉様……じ、実はですね」

「どうした妹よ。まさか、一晩寝て、やつぱり男が良いとか言わないよな？」

言いたいけど、言えなかつた。姉貴の笑顔は喜怒哀楽の全部を表現してしまう、最強の武器である。十七年間、寝食を共にしてきた弟なればこそ、姉貴の言葉に異を唱えるといつことができなかつた。

「ま、まさかー」

「うむ。それでこそ、妹だ。ヨツコ、頼む」

せめて、朝飯を食べたかったと思いつつ、俺はシーツにくるまれたまま、再び風呂場に連れて行かれ、ヨツコなる女に髪を切つてもらうことになつた。

「ヨツコは凄いんだぞ。私もヨツコに切つてもらつていいが、キュー・ティクルが輝くんだ」

キュー・ティクルつて何だらう?という疑問もあつたが、前回同様、

風呂場というシチュエーションが不味かつた。

ヨツコも姉貴も下着姿ではなかつたのだが、俺は寝起きであり、つまるところ、朝の生理現象が「おはよツツー」とでも言つたげにシーツを盛り上げていた。

「……まずは、これからカットするねー」

流石は姉貴の友達である。発想が同じだ。

「悪気は決してないんです。許してやってください」

下半身をして、息子という表現が生まれた理由がよくわかつた。自我を持ち、なおかつ愛しくてならない、血を分けた存在だからだ。

ヨツコがナチュラルにハサミをシーツの盛り上がりに向けたところで、起死回生のミラクルが起きた。

何と言つことはない。あまりの恐怖に血の気が引いただけである。しかし、文学的表現とは便利なモノであり、文字通り血の気が引いた我が魂も、ハサミの魔手から逃れるよう、シユルシユルと萎え萎んだのである。文学万歳。

「つまんないのー」

ヨツコはハサミを引っ込めて、俺の髪を弄り始めた。つまらなくてけつこう。こつちは死活問題だ。

「うん、髪質は柔らかいし、細めだから難しくないね」

ヨツコは特に迷う様子もなく、サクサクと髪にハサミをいれていぐ。女になるために、髪を伸ばすのならわかるのだが、切つてしまふと言つのは、どうなのだらう。

そんな俺の疑問をよそに、ものの二十分ほどで、散髪は終了した。

「じゃあ、後はこれをかぶせて……うん、いいねー」

「じきつぱりとした髪の上に、ふあさつと何かが被せられる。

それがウイッグで、しかも実に上等な品物だと気付くまで、俺はしばらく時間がかかつた。理由は至極簡単で、浴室の鏡に映つた俺は、紛れもない美人だつたからである。

男としての骨格を隠すようなシャギーが施された、ロングヘアのウイッグ。これで喉仏がなくて、胸があれば、凛々しくも美しい女の完成であった。

「わお。見違えるねー」

「流石、血を分けただけある。私の高校時代によく似ているじゃないか」

男としてみれば童顔の俺も、女としてならば凛々しく映る。もしもクラスにこんな美人がいたら、学生生活が楽しくなること請け合いである。もしも御園橋に惚れていなければ、付き合いたいと思うほどであった。

かくして、当初の予想に反して美事な美少女に変身した俺は、割と乗り気で次のステップに進むことになった。

「下着に、シリコンのパッドは買つておいた」

本当にやると決めれば徹底する女である。流石に一糸まとわぬ姿を姉貴に見せるのは憚られたので、一旦、自室でトランクスを脱ぎ、いわゆるパンティと呼ばれる女性物の下着を履いた。

「ぬ……」

割と上等の下着だったのだろうか。男物の大味な履き心地ではなく、ほどよく尻回りを包み込むフィット感。はつきり言って、この感触はハマる。

そして、ブラジャー。はつきり言ってパンツは、男物だろうが女物だろうが、毎日履いているものだが、ブラジャーというのは未知の境地である。最近では、男もブラジャーをつけている人間がいると聞くが、これはどうなのだろうか。

「……ほう」

胸元を優しく包み込む安心感。それでいて決して窮屈ではなく、まるで母に抱かれたような心地よさすらある。

女はみんな、こんな上等な下着を毎日つけて過ごしているのだろうか。流石、三枚五百円のトランクスとはひと味も一味も違

う。

「あとは、パッドをはめて……おおつ」シリコンパッドをブラジャーに押し込んで、形を整える。ごく自然なふくらみがブラジャーとぴったり一致して、安定感も一層上がる。

これは、もう同じ下着という分類であれど、男物とは全く違うものだ。

この喜びを報告すべく、姉貴の部屋に戻る。姉貴とヨシコは既に化粧道具を整えて俺を待ち受けていた。

「ほう。痩せ形だけあって、下着だけだけつこう女らしくなったな」「あとは、お化粧だね」

化粧台の前に座らされて、何やら色々な物が並べられていく。

「ナチュラルメイクは難しいが。化粧水に、化粧下地。後はコンシーラー。こんなところでどうか?」

「いや、さっぱりわからん」

化粧についての知識なんぞ皆無である。化粧水という単語は聞いたことがあるが、化粧下地なんぞものがあることは初耳である。

「口紅とかマニキュアを塗るのが、化粧じゃないのか?」

「……昨日まで男だったから、仕方ないか」

姉貴の溜息の理由はよくわからないが、化粧というのは思つて以上に時間のかかる物らしい。

「いいか。本気でメイクをするなら、化粧水に乳液で潤し、化粧下地を塗り、ファンデーション。コンシーラー、マスカラ、アイシャドウ、アイライナー、口紅、チーク、アイブロウなども使うんだぞ?」「口紅とマスカラはわかった」

「まあ、半分くらいは色鉛筆で代用できるが」

姉貴の言葉に、ヨシコが「それは無茶だよ」と言つたが、もう何が何だかさっぱりわからない。

しかし、目の前に並ぶ大量の化粧品を見ていると、女の顔は作り物だという言葉にも頷ける。姉貴が美人なのは天然物であるが。

かくして俺の顔面工事が開始された。

そのうち、一人で出来るようになれと言われたので、しつかりと姉貴の説明を聞きつつ、ナチュラルメイクを施されていく。幸い、ニキビなどは無い綺麗な肌なので、大々的な工事ではないようだつた。

化粧水で潤いを与える、化粧下地で肌の雰囲気を変えて、コントラーラーで細かい部分を修正。最後にパフで全体をぼやかして、肌の質感を与える。薄くリップクリームを塗り、唇にも艶を出せば、ナチュラルメイクの完成だつた。

「ふむ……流石に男をナチュラルメイクだけで変えるのは無理があるか。ほんの少しだけ、アイラインとチークを使うか」「よくわからんが、頼む」

さらに少し弄つてもらい、姉貴が一つ頷く。

「うむ。これならば化粧をしている雰囲気もほとんどない」「！」これが……俺？

鏡に映つた自分の姿を見て、思わず溜息が漏れた。

髪型を変えただけで雰囲気がぐつと女らしくなつていた俺だが、化粧を施したら、もう完璧に女である。

しかも美人だ。男としては気になつていた低い鼻も、女としてみればやや高めの凛々しさとなり、丸顔の童顔も女の子らしい雰囲気を後押しするものにしかなつていない。クラスの女子の中に並べても、相当上位にランクインできるだろう。下手をすると愛しの御園橋すら凌駕してしまうかもしない。

俺が男ならば、こんな彼女が欲しい。いや、まだ肉体的には男なのだ。

「よし、最後に服だ。これを着てみろ」

姉貴が紺色の分厚い服を俺に渡す。何かと思えば、俺の高校のセーラー服だつた。姉貴は同じ高校出身なので、姉貴のお下がりだろう。

「制服を着るのか?」

「明後日から、それで通つからな」

初耳である。

「え……俺、女装して学校に行くのか?」

「女装じゃない。女だから、女子用の制服を着るのは当然だわ!」
「あ、そっか」

姉貴がさも当然とばかりに答えるので、俺も素直に頷いてしまつ。勿論、翌日の朝に俺が頭を抱えることになつたのは言つまでもない。

朝の六時に姉貴に叩き起しだされ、丁寧にひげを剃り、ナチュラルメイクを施すと、早速ショーツとブラジャー、パッドを身につけて、姉貴の制服に袖を通した。

昨日に一度着ていいので今更だが、サイズがピッタリだというのが悲しい。

ウイッグをつけて喉仏がシャギーで隠れるよつて調整すると、鏡に映つているのは紛れもない凛とした美人女子高生。我ながら天晴^{あつぱれ}である。

ここまで作業を寝起きの抜けた頭でやつてしまい、さて朝食をとと思ったときに、俺はハタと気付いた。

言つまでもなく、両親への顔見せである。

息子が娘になつたなどと露にも思わない両親は、この姿を見てなんと思うだらうか。少なくとも、正氣を疑うといつぱりでは俺と同じだらう。

「ぬかりない」

姉貴は俺の心境を読んだよつてぐいぐいと背中を押し、俺をダイニングに押しやつた。

朝食の用意を終えた母と、パンを囁つていた父が俺を見て、首を傾げる。

「……テツ?」

「……まさかなあ」

あまりに奇天烈な状況では、その状況を認識せずに、ただ混乱するだけという話を聞いたことがある。

両親は「息子 娘」という図式を頭に思い浮かべることも出来ずに、ぼんやりと俺を眺めているだけだった。

「テツが女の気持ちを知りたいというので、しばらく女として生活させることにした。何も問題は無い」

姉貴が俺の背中から顔を出して、問題がありすぎる事を、一言でバツサリと片付けようとする。

流石に無理があるだろうと両親の顔をのぞき見るが、二人ともしばらく何かを考えた後に「ああ、そうなの」「じゃあ、仕方ないな」と、すんなりと受け入れた。嘘だらう父さん、母さん。

「急展開過ぎて受け入れるほか無いという、心理を巧みに突いた美事な作戦だろ?」

「いや、すげー力押しです、ねーさん」

脱力してツツコミを入れるが、姉貴の読みは何故か的中して、以来、両親は俺を女として扱うことにしてしまった。

御都合主義も真つ青の展開であるが、事の発端は俺の無茶な発言だったので、これ以上は何も言えない。

そうした経緯を経て、登校と相成ったわけだが、俺が内心でおそろしいほど心臓を跳ね上げているにも関わらず、周囲は奇異の目で見ることもなく、むしろ好意的な視線すら集めてしまった。

徒步で十分ほど県立陽桜高校までの道のりの中、ほうつと見惚れるような男子の視線やら、羨望のよつた女子の視線をかいぐぐり、教室までやつてくる。既に半分ほど埋まったクラスメートは、俺を見て首を傾げた。そりや そりゃ。

俺はどう説明して良いかわからず、半ば自棄で自分の席に座る。

周囲がもう一度首を傾げたのは言うまでもない。

「あのー。そこ、相良君の席、だよ?」

「さがらくん

親切で優しい学園のアイドル、小早川雲こはやかわ くもが丁寧に教えてくれるが、俺はその相良君であるからして、非常に返答に困った。

「……えっと、転校生の人かな。それだと、まずは職員室に……」

途方もない勘違いをする小早川に、俺は首を横に振つて、それから意を決して口を開いた。

「いや、俺は……」

流石に声帯まで弄つては居ないので、声は男のままである。予想外の野太い声に驚いたのか、小早川はビクつと飛び上がり三歩ほど後ずさつた。

「え。え。え。相良、君？」

「あー、うん。おはよう、小早川」

見慣れぬ美少女に密かに注目していたクラスメイト全員がしばらぐポカンと俺を見る。

そして、次の瞬間に、まるで地球滅亡を知ったかのようなくずくばりい叫び声が一斉に聞こえてきた。

敢えて具体的に表現するならば「どゥええエーーーッ！？」といったところか。全員が声を揃えて叫ぶモノだから、隣の教室の連中まで何事かとやつてきて、そりやもうどんでもねえ騒ぎになつた。

当の俺は、半ば予想していた展開であり、流石に恥ずかしかつたのだが、次の瞬間に何故か小早川を筆頭に、女子達がすんごい勢いで俺を取り囲んだ。冷たい目や他人のフリは予想していなかつたが、取り囲まれるとはこれ如何に。

「ちょ、ちょっと相良君つて、嘘よね！？」

「なに、相良君のお姉さんとかいうオチじゃないの！？」

「けど声、相良君だよつ。っていうか、何でそんなに美人なのッ！

！？」

かの動画サイトの名文句が脳裏をよぎる。

この発想はなかつた。

まさかまさかの大逆転。確かに白画白賛の美少女であつた俺は、なんとマジモンの美少女であつたらしい。

流石に周囲は美少女というか、不気味な存在だと認識すると思つていた俺の不安は一瞬にして払拭され、脅威の質問攻めを喰らつこととなつた。

次第に男子連中もこの異常事態に反応できるようになり、完全に四方八方を取り囲まれた。

「相良君かわいいつ。反則じやないのー」

「つか、どーして女装なんだよ。何かあつたのか！？」

「そんなことより、俺と付き合つてくれ！」

最早、阿鼻叫喚と言つても差し支えのない大混乱に、俺は姉貴プロデュースの恐ろしさを肌で感じた。

普段は挨拶すらしないような、単なるクラスメイトというだけの面々まで加わり、質問に答えよつにも、俺の声は焼き消される始末である。一体、どう收拾をつけたモノやらと困つていると、やがて教室に一人の少女が入つてきた。

俺がこの地獄絵図を作り上げた原因。否、元凶と呼んでも差し支えのない少女。御園橋やよいである。

「おつはよー。どーしたの、みんなして騒いじやつて」

お気楽な声で教室にやつってきた御園橋は、騒ぎの中心にある俺を見つけると、しばらくじつと見つめ、それから何故かほうつと小さな溜息をついた。頬が若干赤くなつており、まるで一目惚れの瞬間。いわゆるボーキミーツガールな雰囲気だつた。ただ、残念なことにガールミーツガールになつてしまつている。

「やよー。ちよつと来てみなさーよ。相良君、女装しちやつたんだけど、超キレーだよ！」

「へつ。この超タイプな御姉様、相良君なのー？」

初つ端から御姉様と来たか。しかも堂々とタイプと口走つているところから、御園橋の動搖具合がよくわかる。

いや、しかしタイプだつたのか。女になつて良かつた。

「とーりーあーえーずーつ。いいからホームルームはじめるわよつ。

御題は当然、相良君についてつ！」

クラス委員長である、眼鏡でお堅い女子が、おっそろしく嬉々とした表情で壇上に立つ。普段は人の話をてんで聞かない我がクラスは、何故か一同全員で「はーい！」と声を揃える団結ぶり。もう、どうにでもなれと諦める俺の心境を、どうか察して欲しい。

さて、始業前の自主ホームルームが開始されると、眼鏡委員張の的確な采配の元、俺はやっぱり質問攻めに遭つっていた。

「どうして女装したんですかー？」

「えーっと……その、まあ……」

壇上に立たされた俺は、やっぱり説明に苦しんで、ちらりと御園橋を見た。

先週末に「女になる」と宣言した以上、御園橋は理由が自分であることを理解していらっしゃる。流石に困った顔をしていたが、俺が見つめていることがわかると、ポツと頬を染めて恥じらいつつ田代をそらした。

先週までの俺にその仕草をしてくれたらと思つと、涙も禁じ得ない。

「ねえ、相良君つてばー」

「あ、ああ。ええと、その……これは、女装じゃなくつてだな……」
とりあえず御園橋の愛らしい仕草については後から考えることにして、この困った現状に対処せねばならない。

色々考えてみたが、あんまり派手な嘘をついても仕方がないので、御園橋が原因であること以外は、概ね事実を話してしまつことにした。

「俺は……その、女になるって決めたんだ。別に性同一性障害つてわけじやなくて、その……」いや、思うところがあつてさ」「俺の回答に、一同はさらに興味を示してしまつたらしい。

「女になるってことは、その、アレか。性転換？」

「まあ、そうなんだけど……いや、俺もよくわかんないけど、女にならないといけねえんだ」

張本人たる俺がよくわかつていないので、当然ながらクラスメイトもよくわかつていなかつた。

ただ、女装趣味を発露させたわけではなく、女になりたいという意志のもとでの行動と理解は得られたようで、一同はとりあえず納得はしてくれた。疑問自体は尽きていたが、担任の仁科先生が教室に入ってきたので、流石にお開きになつた。

「おはよー。今日はなんと、突然の転校生を紹介する……つて、アレ。こんな女子、ウチの学校にいたつけ？」

教室に入ってきた仁科先生は、意気揚々と喋る途中で、俺に気付いたのかぼんやりとしている。

それよりも、その言葉の内容である。突然の転校生という言葉に、俺はマジかと興奮したのだが、周囲は「へえー」という冷めた感想である。

俺は委員張に手を引かれ、自分の席に座らされる。

「先生。とりあえず、この美少女は相良君なんで、納得してください」

トンデモ発言を口にした委員長だが、何故か仁科先生は「そつか。そういうや相良がいないと思つてたんだ」と、あまりにも見事なスル一を決めてみせた。まだ若く、今回が初の担任受け持ちであるというのに、心が広すぎる。

「じゃー、ホームルーム始めるぞ。さつきも言つたが、突然だけど、転校生を紹介する。山田君、入ってきて」

仁科先生の言葉に、教室の扉が開いて、けつこう爽やかな一枚目の男子が教壇にのぼる。

「山田爽海です。長野から転校してきました。まだわからぬこともあるので、宜しくお願ひします」

きらりと白い歯を光させて、にっこりと微笑む姿は、もう青春ドラマの主人公のようである。さぞかし女子も色めきだつだろうと思ひながら、拍手をしたのだが、やっぱり思惑はずれて、周囲は特に驚くでもなく、黄色い声を上げるでもなく、どこか適当な感じだつ

た。

「んー。まあ、質問とかは追々な。席は相良の隣が空いてるし、そこに座つてくれ。相良、拳手」

先生に指名され、俺は思わず手を擧げる。爽やか山田君は俺を見つけて、ふと驚いた顔をした。やつぱり女装がバレたかとひやりとするが、どうしてか、山田君は頬を桃色に染めて、につこりと笑うのだった。

山田君は俺の隣の席に座り（元の持ち主は現在、骨折で入院中）、俺の方を向くと「よろしくね、相良さん」と笑いかけた。

どう訂正しようかと思つてゐるウチに、仁科先生はサクサクと教室を出て行つた。転校生に色々と質問したいだらうという配慮なのだろう。案の定、周囲の連中は一齊に隣の山田君の席をして、何故か俺の席に來た。

「ねえ。名前、何て言つの？」

それは俺に対する質問なのだろうか。

「いや、テツ……」

「だめだめ。そんなの、女の子らしくないわ。テツ口だと部屋になつちゃうから……」

「テツって、あれよね。哲學のテツって字よね。たしか、ヨシツて読むことも出来る筈よ」

「じゃあ、ヨシ……ヨシヒチャんにしましょ。相良ヨシヒ」

勝手に改造。もとより、勝手に改名されてしまつた。事の急展開に全くついて行けず、オロオロしてしまつが、それよりも問題は隣の山田君である。きっと、彼も自分が質問攻めにあうだらうと思つていたのだろうが、まさかのニアミス。よもや、隣の席の男子が、女子になつて登校してきたとは思わなかつただらう。ぽつねんと席に座り、不思議そうに俺を見ていた。

男前だし、爽やかなのに可哀想だ。「ただしイケメンに限る」という法則も、この特殊な環境下では何の役にも立たないらしい。

だが、しかしである。

「相良さんは人気者なんだね」

さぞ落ち込んでいるだろうと思つた爽やか山田君は、驚いたこと
にちつともメゲずに、他のクラスメイトに混じつて、俺を取り囲む
一員となつていた。

「あ、いや……これには、その、事情があつて」

「いや、こんなに綺麗な人だから、わかるよ。ハスキーボイスも、
すごく似合つてる」

このイケメン。俺の声をハスキーボイスという設定にしてしまつ
たらしい。

転校生という美味しいポジションを、单なる新参者にまで貶めた
俺に対して、怒りの一つも見せないのは、彼が紛れもない好人物で
ある証拠だろう。だが、何とも歯の浮くような台詞を並べられても
困る。具体的に何が困るかと言えば、反応と対応にだ。

流石に周囲の女子達も山田君の反応に感じるところがあつたのか、
数人が少し離れてコソコソと相談し始める。一体何を喋つているの
かと思つた頃には、もう戻つてきて、その中の一人が、俺にこそつ
と耳打ちした。

「面白そだだから、山田君には女で通してね」

突然の転校生 単なる新参者 道化

たつた数分での、見事なまでの右肩下がりの人生に、同情の念を
抱かずにはいられない。

かくいう俺の人生も、大概のものようだが。

ちよつとしたお祭り騒ぎに発展した俺の女人化騒動だが、慌ただ
しくも特筆すべきことなく、一日目を終えた。

特筆すべきことがないのは、要するに毎度毎度、休み時間には色々なヤツが俺の周囲に押しかけ、山田君は既にギャラリーという一
点でのみクラスに完璧に打ち解け、教師陣は仁科先生に含められた
のか、俺が女であることを黙殺するということが続いただけである。

ただし、最後の最後。放課後に問題が発生した。

尾籠な話で恐縮ではあるが、尿意がとっても不味い状況になつて いるのである。

この格好で男子トイレで用を足すのは変態で、だが女子トイレに入るのもやっぱり変態という極めて異例の事態に見舞われた所為で、昼休みからずっと我慢しているのである。若き男女の集う高校という場所に、男女共用トイレは無い。

かくして、俺は相変わらず女子に囮まれて顔を見つめられたり、頭を撫でられたりしている中、いかんともしがたい尿意との戦いを繰り広げていたのである。早く黄雀の中をダッシュで帰宅したいのだが、いわゆるガールズトークなるものの中に引き込まれ、おいそれと切り出せない。

「女の子なんだから、女の子同士の話もしないとねつ」

「よつしーとよつち、どつちで呼ばれたい?」

でつでにうは勘弁だ。木の実やら敵やら何でも食い、挙げ句の果てに腹の中で異種交配をさせて卵でキノコを孵化させる脅威の恐竜は、最早恐怖でしかない。

「よ、よつちで……」

「じゃー、よつち。この後、みんなで遊びに行こいつよつ

「え、いや……できればすぐに帰りたいんスけど……」

「だめだめ。女の子は付き合いが大切なんだから」

何故かクラスの女子一同は、俺の女装を受け入れただけでなく、俺の女人化計画を後押しする方向で意見がまとまつたらしい。嬉しそぎて涙が出そうだ。涙は嬉し涙と悲し涙で味が違うそうだが、この涙はきっと、いつもよりしょっぱい筈だ。

しかし、付き合いに男女の差はあれど、尿意に男も女もない。美女少女はトイレに行かないなんて大嘘である。

流石に衆目の面前でお漏らしをするわけにもいかず、女子一同の協力態勢も考慮した結果、俺は素直に白状することにした。

「あの……トイレ、行きたいんだ……」

「行つてくれればいいじゃない。それくらい待つわよ?」

「いや、それなんだが……男子トイレでこの格好、不味いかう……

家に帰つて、一回トイレに」

「あー、そういうことね。女子トイレ使えばいいじゃない」「さらつと流したのは、相変わらずの眼鏡委員長。ある意味、俺よりも男氣に溢れた発言である。

「け、けど……」

「あ。そういう、オトヒメの使い方わかんないかも。いいわ、教えてあげる。一緒に行きましょ」

オトヒメとはなんぞ。と思う前に、俺は委員長に手を取られ、あれよあれよという間に教室を連れ出され、女子トイレに放り込まれる。

「こりゃイカンと慌てるも後の祭りで、委員長は個室に俺を引っ張り込み、ガシャンと鍵をかけた。狭いトイレの個室に一人きりである。

「ふふ。よつちを独り占めできるなんてね」

「……委員長?」

「ふふ、ふふふつ……」

人として大事な何かが壊れてしまったのか、委員長は分厚い眼鏡をキラリと光らせて、不気味に笑う。

今朝まで、大人しくて愛らしい眼鏡つ子だったのに、一体どこでアイデンティティの崩壊を起こしてしまったのだろうか。トレードマークの三つ編みを何故か解いて、俺を便座に座らせた。

「さあ。して見せて」

「……何を?」

「おしつこ」

聞かなければ良かつた。何が悲しくて人前で放尿せねばならんのか、さっぱり意味がわからない。

つら若き女性の口から聞こえてくる尾籠な表現に、本来ならば何かしらゾクつとしておきたいところなのだが、何よりも恐怖のほうが

が勝った状態では 立つ瀬が無いとでも言おうか。

「したかつたんじやないの？」

「いや、そうだけども。出て行つてくれ」

「だめだめ。オトヒメの使い方知らないんでしょ。女の子なんだから、知つておかないと」

嬉々として言つ委員長だが、俺は生憎と放尿を見られて喜ぶような性癖を持ち合わせてはいない。

何やら委員長の口からは「女装で放尿とか美味しいわあ」というえげつない独り言が漏れてくるので、彼女はそういう性癖の持ち主なのかもしねえが。

「……ま、流石にしゃーねえか」

長らく委員長に構つていると、それこそ本当に漏らしてしまつかもしれない。

俺は思わず自分に惚れてしまいかねない美人ではあれど、元は男であるからして、男の特権もまだ持つていて。

恍惚の笑みを浮かべる委員長を尻目に、鍵を開けると、そのまま委員長を外に力ずくで押し出す。改めて鍵を閉めてしまえば一安心である。男の腕力行使するのは憚はばかられたが、場所が場所なので仕方ない。古来、トイレをばかりと呼んだしつだが、なるほど、色々と憚つてしまふ場所である。

「よつちー、ひどいよう！」

扉の外で委員長が非難の声を上げるが、ひどいのは明らかに委員長の行動と性癖である。俺はそろそろ危険な膀胱に安寧を与えるために、チャックを降ろし チャックが無かつたので、スカートをめぐりあげた。

「む……」

女性用の下着をかすかに盛り上げる心の友に、なんとなく委員長の求めているところがわかつた気がする。

まだ骨格こそ男ではあるが、制服や下着のおかげで、女の子の股間に男の子がくつづいているよつた絵になるのである。

これは確かに、そのギャップと、うー一点に關して言えば相当のものである。見た目だけなら両性^{ふたなり}具有である。俺に特殊な性癖があれば、このまま心の友は別の液体を吐き出す準備をしていたかもしない。

「……ま、自分の身体だからなあ」

俺はそそくさと用を足し（仁王立ちでの、男らしい排尿であったことを明記しておく）、水を流して個室を出た。

委員長がすぐ悔しそうな顔をして出迎えてくれた後に、オトヒメの正体を教えてくれた。

なるほど、女の子の恥じらことは、中々に纖細なものである。

その後、クラスメイトの女子達と喫茶店に寄り、携帯のアドレスを交換したりと、女の子同士の交流の後、よつやく俺の長い一日は終わった。

御園橋のために女になろうと思つたが、肝心の御園橋と喋る機会は無く、中々に先が思いやられる。転校生の山田君にはたいへん申し訳ないタイミングだったし、委員長の黒い一面も見てしまった。

「いや、それよりも……」

ふと、帰り道の先にある我が家を見て、気が重くなる。

姉貴のことだから、また色々と用意しているのだろう。ありがたいと言えばありがたいのだが、それ以上に憂鬱になるのは、仕方のないことだと思つ。

(後書き)

序章だけ続ぎません。下ネタと威勢の良い姉貴が書きたかった
…それだけなので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2575h/>

没物語 序章

2010年10月8日13時52分発行